

「ボーイスカウトらしさって何？」

演者 ずっこけブラザーズ

金	金子（小学4年生）	並び順	金子	右近	岡田
右	右近（小学4年生）		↓	↓	↓
岡	岡田（小学4年生）			前	

金 「ずっこけブラザーズの金子で～す」

右 「右近で～す」

岡 「岡田で～す」

金 「なんや、今年も早いんですね」

右 「そうですね。」

金 「あと、300日でお正月ですよ」

岡 「えっ、300日？」

右 「それ3月のネタですよ」

岡 「いまはもう、8月ですよ」

金 「あれ、早く言ってくださいよ。まだ3月だと思ってました。」

右 「そんなやついないでしょう」

金 「このネタ困りますね。残りは何日ですかね。教えてください。」

岡 「今日は8月23日だから、ええっと、そうですね。

あと、お正月まで310日（さんびゃくとうか）ですよ」

右 「増えてる。増えてるがな。前より日にちが増えてどうするの」

岡 「アバウトですよ。そんなに差はありません」

金 「はい。たった120日程度です。そんなに差はありません」

岡 「そうそう。このまま冬の気分で。続けましょう」

右 「かなり、暑い冬ですよ。汗がでる話ですね」

岡 「そうそう。冷や汗いっぱいかいています。

はい、君の番ですよ。『あと、300日でお正月ですよ』の続きをどうぞ」

右 「やりにくいですね。気持ちを変えて、はい。それでは。

なんですか。すぐお正月がくるみたいじゃないですか」

金 「まあ、そんな気がする今日この頃になりました」

岡 「全然なってえへんわ。それより、なんか楽しいことしませんか」
右 「たとえば、どんなこと？」
岡 「そやな、みんなが見てはるし、一発芸というのはどうですか」
金 「一発芸！
（顔を変える。両手を顔にあてて下から上にあげて般若（はんにゃ）の面のような顔をする）」
（笑い）
右 「乗りがいいねえ」
岡 「一発芸（同じことやる）」
金 「もう一回、一発芸（同じことやる）」
右 「それしかないのかい」（笑い）
金 「もうすぐ、スカウト祭があるから、頑張ってるねん」
右 「うちのスカウト祭は12月ですよ。そなんきたら、もう一年終わってしまうで」
岡 「それでは、カブ隊とボーイ隊対抗の手旗しりとりをやりま〜す」
右 「それ、浜嶋隊長やん」
金 「どすこい、どすこい。大相撲！」
右 「それ、風間隊長やん」
岡 「ビーバー隊は手話をしま〜す」
右 「それは川辺隊長やん。そなんしかないんかいな」
金 「アグーナリー、アグーナリー」
右 「それもベンチャー隊。独創性がないわ」
岡 「1、2、さあん、4、5、ろお〜く」
金 「それは僕の特技じゃないですか」
右 「はは一。きみは、御本家（ごほんけ）さんですね。これ、もう売れてへんけど、
懐（なつ）かしいな」
金 「(ゆっくりえらそうに)
独創的独自芸（どくそうてきどくじげい）ちゅうねん」
岡 「懐かしいわ。ちょっと、そのうまいところ、いっぺんやってくれへん」
金 「(てれながら)
えっ、ほんまに。まあ、僕の一発芸というか、やってもええけど、・・
（おちやめに）何かもらえますか」
右 「現金（げんきん）なやつちやなあ。
（きどって芝居調に）
何かさしあげるようなことまでして、
見たいというものでも、え、ございませんが〜」
金 「ほな、ありがとう。優秀スカウト賞をもらえたらいいですから」

岡 「あげるって、言うてないって」
小 「けちやなあ。まあ、（明るく）特別サービスにさせてもらおうわ」
岡 「きみの方がケチでしょう」
右 「いっぺんやってみい。そのかわりまちがえなや。1回間違えたら、罰ゲームしてもらからな」
金 「(感情を込めてこわそうに) そんなこわいこと言わんといて」

岡 「ハイリスク・ハイリターンや」
金 「ハイ、ハイ、なんちゅういうた？」
岡 「ハイリスク、ハイリターン」
金 「えらい言葉知ってるな」
右 「きみ、それでどういう意味かわかっとるんかいな」
金 「わからん！」
右 「ほな感心したらいかんがな」
岡 「早い話が、優秀スカウト賞は簡単にはもらえないちゅうことや。失敗したら罰ゲームになって、優秀スカウト賞はもらえないんや」
金 「なんかそんやな」
右 「だいたい、きみがスカウトらしくないことが原因（げんいん）なんよ」
金 「(歌う)
花はかおる〜よ。はあな〜の〜かにい〜」
右 「日はかがあやくうよ〜。日のひいかり〜」
金 「えらい、音痴（おんち）ですね〜」
右岡 「(大きな声にする) われらにめいよーのおもきあり〜」
金 「お、スカウトらしくなってきましたね」
右 「(馬鹿にして)
そういうことじゃなくて、きみの考え方がいやしいのよ」
金 「(すまして)
いやしくも、いやしくも、僕は、えー2組のえー、じちょうなんですよ」
右 「(馬鹿にして)
じちょうぐらいで、えらそうにするんかい」
岡 「どうでもいいけど、一発芸をやったぐらいで何かもらおうなんて考えるからいけないのよ。ほんとにスカウトらしくない」
金 「ちょっと待ちたまえ、君たち、君たち、いやしい君たち」
右 「君がいやしいんや」
金 「ありがとう。そんなに褒めなくてもいいです」
右 「褒めてへんわ」

小 「まあ、いい。じゃあ、君たちに、スカウトらしさについて、僕が教えてあげよう」

岡 「えらそうに、(りょうてをそろえて、にわたりの首のようにぜんごに動かす) ぜひぜひ、教えてもらいたいもんです」

右 「(同じかっこう) ぜひぜひ、御願います」

金 「気持ち悪いわ。じゃあ、君たちにちょっとお芝居をしてもらいます。僕はナレーターです。(手をシナリオ本のようにして読むように。手は低くかまえる)

(ナレーションとして、ゆっくりとはなす)

はい。スカウトについて。こういう話を知っていますか。

かつて、あるところのイギリスのロンドンのお話」

岡 「なんですか？ロンドンって言うところかな。どこがあるところのや」

金 「そのロンドンの霧に包まれた街角で、薄暗い夕暮れに一人の紳士が道に迷っていました」

(ここで右近と岡田が芝居をする)

岡 「まあ、いいわ。右近君、二人で芝居始めるで」

右 「僕が一人の紳士です。」

金 「一人に決まっています」

岡 「僕も一人の少年です」

金 「君も一人に決まっています」

右 「こまったな。道がわからなくなった。霧(きり)が深いし、暗くなってきた」

金 「そこへ、一人の少年がとおりかかりました」

岡 「どうしたんですか」

右 「道がわからないんだよ。こまった。(大きな声で) こまったなー」

(手で遠くを見るようなしぐさをする)

金 「大きな声。この紳士はほんとに困っていないかもしれません」

岡 「地図を持っていますね。見せてください」

右 「どうぞ見てください」

岡 「あっ、わかりません。さようなら」

金 「待って、ダメな一人の少年。帰ったらいかんでしょう。ちゃんとした少年役をお願いします」

岡 「普通の少年からボーイスカウトに変身。

(両手をあわせた姿勢から両手を上に広げる)」

金 「えらい大げさですね」

右 「頼みますよ。もう、お腹も空いてきましたから」

岡 「はい、見せてください。大丈夫です。ちゃんとした少年ですから。ここでしたら、ここをまっすぐいって、3本目を右にまわったところです」

右 「あっ、そうですか。ありがとう。助かりました。

ちょっとまって、お礼にこれを受け取ってください」

岡 「お礼はいりません。きをつけて行ってください。さようなら（敬礼をする）」

金 「親切な少年は、さっと立ち去ります」

右 「ああ、行ってしまった。すばらしい少年だ。ロンドンにはこんな少年がいるんだ」

金 「紳士は、後でこの少年を探しましたが見つかりませんでした。

実は、この少年を『アンノウンスカウト』と言います。

ということで、君たち、スカウトらしさがわかりましたか」

右 「すごいですね。スカウトらしさが、よくわかっているじゃない」

金 「えっへん。（正面を向いて）では、皆様　せかいのナベアツを聞いてください」

岡 「時間がきたようなので、このへんで」

右岡 「失礼しま〜す」

金 「あっ、待って。（おいかけるまね。一歩だけ動かして戻る。）

（かっこよくナベアツを途中までやる）

1、2、サーン、4、5、ろーく、7、8、きゅーう、10、11、12、13

14、15、16、17、18、・・・」

岡 「(戻ってくる) いつまでやっとするの」

金 「はあ、はあ、一発芸は、楽しいです」

右 「これで終わります。」

金岡 「ありがとうございました」